

〔教授研究会報告要旨 4〕

2016 年 1 月 18 日

省くか残すか ——「省略」と情報伝達における言語間の違い——

尹 盛 熙

(関西学院大学国際学部准教授)

言語における「省略」とは、何らかの理由で言語化しないと判断したものは省き、意図したメッセージを相手に伝えようとする行為と定義することができる。特に、省略で長さを減らして多くの情報を詰め込んだ、圧縮的な言語形式を作ることは、最小の労力で最大の情報を伝えるという、コミュニケーションの効率を高める手段となる。効率のよさを求めることは言語普遍的な傾向だと考えられるが、それを実現する省略の方式は言語によって異なる。

省略は話し言葉・書き言葉を問わず、様々な種類のテキストで観察されるが、特に新聞の見出しや、外国語映画などにおける翻訳字幕など、時間的・空間的制約が強いテキストで頻繁に用いられる。このようなテキストを観察すると、日本語と韓国語の省略に傾向の違いがあることが確認できる。欧米 TV ドラマにおける日本語の字幕では、情報内容を減らす以外に、文の成分や文法要素を削って短さを実現することがあり、特に述語の一部または全部が省かれる現象が見られる。ところがこれは、同一作品の韓国語字幕ではほとんど見られない傾向である。さらに新聞見出しを観察すると、日本語見出しでも述語における省略が見られるが、韓国語見出しに比べて助詞の省略が少ないという傾向が確認できる。即ち、日本語は文を短くする際、助詞を残して述語を省くが、韓国語では反対に、助詞を省いて述語を残すということになる。動詞に代表される述語は、文が表す出来事がどのような類の事象かを示し、助詞はその事象における登場人物（参与者）がどのように関わるかを示すものである。何を残して何を省くか、日韓両言語において傾向の違いが見られることは、省略文を解釈するプロセスも異なる方向で働くことを意味する。日本語では助詞から得られる「参与者の関わり方」という情報を手掛かりに、省かれた述語が示すはずの出来事の内容を推測することになる。その一方で韓国語では、省かれた助詞が担う「参与者の関わり方」を、残された述語から推測するという反対の戦略をとっていることになるのである。